

小学校普通学級に在籍する脳性麻痺児の交友関係に関する一考察

—— ソシオメトリック・テストによる分析 ——

丹 生 泉・石 部 元 雄

本研究は、小学校普通学級に在籍する脳性麻痺児（以後CP児と略す）の知能、性格特性、運動機能の各面が、学級内の交友関係にどのように影響しているかを把握するため、ソシオメトリック・テストの実施を通して、①CP児の社会的地位と学年、IQ、学業成績、性格、ADL能力との関係、②回答させた選択理由、排斥理由から、CP児と普通児の交友関係における結合と分離の要因、について検討したものである。対象は、小学校普通学級に在籍するCP児13名とそのCP児が所属するクラスの普通児471名であった。その結果、CP児群の社会的地位は、普通児群に比して有意に劣っており、その差は低学年においてよりも、高学年においての方がより顕著であった。そして社会的地位の高いCP児には、性格特性の自己中心性、固執性、劣等感の項目に良好さが示された。しかし、学級適応において重要さが考えられるIQの高さ、ADL能力の良好さいかんは、CP児の社会的地位の高さを規定する要因としては、有意に関与していなかった。その他、普通児がCP児を友人として選択、又は排斥の理由の中に障害に関した理由は、選択で16.3%、排斥で9.1%がそれぞれ含まれていたことなどを明らかにした。

キーワード：脳性マヒ 統合 ソシオメトリック・テスト

問題と目的

ソシオメトリック・テストを用いて脳性麻痺児（以下CP児）の交友関係を明らかにした研究に、Dewey, G. & Force, D. (1956) と Anderson, E. M. (1973) の研究が挙げられる。これらの研究においてCP児は、他の児童から選択をうけることが少なく、さらに他の肢体不自由児（二分脊椎児や整形外科の手術を受けた児童）と比しても社会的地位は低い、とされていた。また Centers, L. & Cepters, R. (1963), Billings, H. K. (1963), O'Moore, A. M. E. (1980) 等の研究も前者の同様に、肢体不自由児に対しては、普通児からの選択数の少なさを指摘し、普通学級における適応状況には問題があることを示唆した。

他方、我国のこれに関する研究には、安藤(1979)の研究がある。この研究は、CP児6名を対象に所属する学級集団にソシオメトリック・テストを実施し、CP児の学級適応を検討したものである。その結果は、前者の Force, D. や Anderson, E. M. の知見を支持するものであり、CP児の社会的地位が学級平均をだいたいにおい

て下回っていることを明らかにした。この他にも学習、遊び、写真の三場面の中で、最も遊び場面での社会的地位が高いこと、対象児は全体的に社会的地位の高い児童を選択し、低い児童を排斥する傾向にあることなどを指摘した。

これら一連の研究は、ソシオメトリック・テストを用いて学級におけるCP児の社会的地位を明らかにしており、いずれの場合もCP児の社会的地位が低いことを指摘している。しかしながら、この社会的地位の低さがCP児の持つ特質（例えば、年齢、知能、性格、障害の程度等）といかなる関係にあるかは、十分に検討されていない。また、他児童がどのような理由でCP児を好み、CP児との結びつきを求めているのか、またはどのような理由でCP児を嫌い、排斥しているのかという傾向についても明確でない。

そこで本研究においては、下記の点を明らかにすることを目的とする。

- ①. ソシオメトリック・テストの手法によって得られたCP児の社会的地位とCP児の学年、IQ、学業成績、ADL能力との関係を検討してみる。具体的には、低学年と高学年の場合でCP児の社会的地位に差がみられるかどうかを、

また社会的地位の高い者は低い者に比べて、IQ、学業成績、性格、ADL能力が良好かどうかを検討する。

- ②. ソシオメトリック・テストにおいて回答させた選択理由、排斥理由から、CP児と他児童の交友関係における結合と分離の要因を検討する。そしてその中にCP児の障害がどの程度反映されているかを明らかにする。

方 法

1) 調査対象

調査対象は Table 1. に示す通り、小学校普通学級に在籍するCP児13名とそのCP児が所属するクラスの普通児471名である。

Table 1 調査対象

	クラス	普通児	CP児	計
低学年	5	181	5	186
高学年	8	290	8	298
計	13	471	13	484

注) 低学年1～3年 高学年4～6年

2) 調査内容

①ソシオメトリック・テスト

a. 被験集団

CP児の在籍する小学校普通学級(13学級)

b. 集団の範囲

所属する学級集団の範囲に限定し、そこで選択、排斥とした。

c. 選択・排斥の基準

学習と遊びの二場面とした。

d. 選択・排斥の人数

5人までとした。

e. テスト用紙

質問紙法単純ソシオメトリック・テスト(QS型)を使用した。

②CP児に対する個人調査

a. 障害の型・程度

b. ADL能力

姫野他試案による脳性麻痺児におけるADLの発達評価を適用した。

c. IQ

田中ビネー知能検査を実施した。

d. 学業成績

各担任教師から5段階評価を得た。

e. 性格

心身障害児童生徒性格診断検査(PIH)を実施した。

3) 調査期間

昭和58年7月～10月に実施した。

4) 結果の分析方法

①CP児の社会的地位と所属する下位集団の分析

社会的地位は、社会測定的地位指数(Index of Sociometric Status Score, 以下Isssと略す)を算出し、これによって求めた。それは次の公式によった。

$$Isss = \frac{1}{2} \left(\frac{CRS}{N-1} + \frac{mc-mr}{d} \right)$$

但しN=成員数、CRS=選択排斥差引得点、mc=相互選択数、mr=相互排斥数、d=選択排斥制限数(ここでは5)とした。またこのIsssの確率分布は、正規分布に近似することが確かめられている(田中、1969)ため、成員数の異なる集団の比較も可能である。

なお、CP児が学級内のどのような集団に属しているかは、各学級ごとに集団構造マトリックス(Table 2.)を作成し、これによってCP児の所属する下位集団の構成を具体的にした。

②CP児の社会的地位と学年、ADL能力、

IQ、学業成績、性格との関係の分析

これについては下記の分析を試みた。

a. 低学年と高学年のIsss平均値の差の検定

CP児群を低学年群(1～3年)と高学年群(4～6年)とに分け、両群間でIsss値に差があるかをみるため、平均値と標準偏差を算出し、平均値の差の検定(t検定、コックランコックス法併用)を行なった。またCP児群のIsss平均と普通児群のIsss平均とを低学年と高学年の場合で比較して、低学年と高学年のどちらの方に両群の差が顕著であるかを検討した。

b. 交友関係良好群と不良群のADL得点、

IQ、学業成績、性格(PIH得点)の差の検定
学習と遊び場面のIsss平均値を算出し、その平均値のプラスの者7名を交友関係の良好群とし、マイナスの者6名を交友関係の不良群とし、両群間でADL能力、IQ、学業成績、性格特性の各得点それぞれに違いがあるかどうかをみるために平均値と標準偏差を算出し、平均値の差の検定

Table 3 選択・排斥理由のカテゴリー

選 択 理 由	1	相互的 接 近	住所が近い、通学路が同じ、席や列順が近い、一年からの友達、いつも一緒に遊ぶ、母同志が友人など外面的条件によって動機づけられるもの
	2	好 感	感じが良い、何となく好き、明るい、おとなしい、元気がよい、おもしろい、陽気など消極的な感情要因
		愛 着	とても好き、仲良し、一緒に遊びたい、一緒に勉強したい、友達になりたいなど好感のカテゴリーより、より一層積極的な感情要因で相手への愛着をあらわしているもの
		被愛着	ものを貸してくれる、世話してくれる、教えてくれる、一緒に遊んでくれる、慰めてくれるなど、相手からの愛情（被愛情）をあらわしている
	3	尊 敬	勉強がよく出来る、物知りである、スポーツがうまい、頼りがいがあるなど、相手の学業や技能、人格特性に対する尊敬
共 鳴		趣味や希望、意見などの一致、気が合う、話が合うなどの共鳴	
4	集団的 協 同	教え合う、助け合う、一緒に相談し合うなどの同一目標追求のための協同の態度 チームワークがうまくいくなどという集団を基準とする行為	
5	その他 障 害	以上の何れにも入らないもの、意味不明 身体障害者に基づく理由（他児童がCP児を選択した場合のみ）	
排 斥 理 由	1	直接的 攻 撃	身体的攻撃 たたたく、ぶつ、ける、暴力を振るう、乱暴するなどの身体的攻撃に対する反対要因
		言語的 攻 撃	悪口を言う、陰口をたたたく、ひにくを言うなどの言語的攻撃に対する反対要因
	2	反 感	何となくきらい、きたない、不潔、下品、泣きむし、おこりっぽい、おもしろくない、おとなしい、静かななどの消極的な反対要因
		けん悪	うるさい、さわぐ、じゃまする、いじわるする、いやらしいことをする、などの反感のより一層強いもの、また悪質な行動側面に対する積極的な反対要因
		疎 外	仲間に入れてくれない、返事をしない、仲間外れにする、一緒に遊んでくれないなどの疎外
3	劣 悪 非 難	うそつき、無責任、意地悪、わがまま、勉強が出来ない、運動が出来ないなどの相手の人格特性や学業、技能に対する劣悪批難	
	対 立	意見が違う、考えが合わない、気が合わない、いつもけんかになる、仲が悪いなどの対立	
4	個人的 競 争 利 己 的	自分勝手、ガリ勉、競争意識が強すぎる、チームワークを乱す、分担した仕事をせずに私事に専念するなどの利己的行為ないし個人的利益に専念している行為に対する反発	
5	その他 障 害	以上の何れにも入らないもの、意味不明 身体障害に基づく理由（他児童がCP児を排斥した場合のみ）	

(1956)とAnderson, E. M. (1973)、安藤(1979)等の結果を支持するものであり、CP児の社会的地位の低さが認められた。

2) CP児群の社会的地位と学年、ADL能力、IQ、性格との関係

①社会的地位と学年との関係

普通児群においては、学習と遊びの両場面とも

高学年のIsss平均が、低学年のそれより高かった。この差について検定を行なったところ、学習場面 ($t = -3.539, df = 232.614$) と遊び場面 ($t = -4.060, df = 245.900$) でともに、0.1%の有意水準で高学年のIsss平均が低学年のそれより高かった (Table 6.)。これより普通児群については、高学年の方が学級集団における対人関係が発達していると考えられる。高学年になるにつ

Table 4 対象児のソシオメトリック・テストの結果

対象児	被選択数	R	CRS	mc	mr	Isss	判定 ※	学級の Isss平均	学級構成	
		被排斥数	C-R	相互 選択数	相互 排斥数					
低	C-1	2	0	2	0	0	.02	周辺児	.16	N=39
		0	0	0	0	0	.00	孤立児	.15	(B=20, G=19)
学	C-2	8	0	8	3	0	.40	第一集団(11)	.10	N=38
		3	1	2	1	0	.12	第一集団(8)	.11	(B=19, G=19)
年	C-3	6	0	6	2	0	.28	第一集団(18)	.13	N=38
		2	0	2	0	0	.02	周辺児	.12	(B=22, G=16)
高	C-4	1	1	0	1	0	.10	第三集団(4)	.11	N=38
		2	1	1	0	0	.01	周辺児	.14	(B=20, G=18)
学	C-5	3	1	2	1	1	.03	第四集団(2)	.12	N=33
		3	1	2	0	0	.03	周辺児	.14	(B=21, G=12)
高	C-6	2	18	-16	1	1	-.23	第二集団(7)	.19	N=35
		0	11	-11	0	0	-.16	孤立児	.21	(B=17, G=18)
年	C-7	2	4	-2	0	0	-.02	周辺児	.21	N=36
		1	0	1	0	0	.01	周辺児	.18	(B=18, G=18)
高	C-8	0	8	-8	0	1	-.20	孤立児	.16	N=39
		0	3	-3	0	0	-.03	孤立児	.16	(B=19, G=20)
学	C-9	6	1	5	3	0	.36	第二集団(9)	.27	N=40
		4	1	3	3	1	.23	第四集団(4)	.20	(B=23, G=17)
年	C-10	2	4	-2	0	0	-.02	周辺児	.20	N=41
		0	1	-1	0	0	-.01	孤立児	.19	(B=20, G=21)
高	C-11	0	7	-7	0	1	-.18	孤立児	.15	N=40
		0	6	-6	0	1	-.17	孤立児	.14	(B=22, G=18)
学	C-12	0	14	-14	0	3	-.48	孤立児	.12	N=39
		1	9	-8	0	0	-.10	周辺児	.17	(B=19, G=20)
年	C-13	5	0	5	2	0	.29	第二集団(7)	.29	N=28
		3	0	3	1	0	.15	第一集団(10)	.21	(B=12, G=16)
平均(SD)		2.8	4.5	-1.6						
		1.5	2.6	-1.2						

(注) 上段, 学習場面 下段, 遊び場面 N=人数 B=男児 G=女児 ※ 所属下位集団 ()内構成人数

Table 5 普通児群とCP児群のIsss平均

		学 習	遊 び
普通児 (N=471)	M	.165	.169
	SD	.203	.175
CP児 (N=13)	M	.027	.008
	SD	.250	.110

Table 6 学年別にみた普通児群のIsss平均

		学 習	遊 び
低学年 (N=181)	M	.123	.129
	SD	.205	.155
高学年 (N=290)	M	.191	.155
	SD	.198	.182

れ、対人関係が発達していくことは、ソシオメトリの創始者であるモレノの研究ですでに一般化されていることである(水原, 1960)。すなわち高学年ほど学級内の孤立児が減少し、一対結合、三角結合、連鎖結合などが増加すると認められている。

他方、CP児群については、前述の普通児群とは逆に、学習と遊びの両場面とも低学年のIsss平均の方が高学年のそれよりも高かった(Table 7.)。しかしながらこれについて検定を行なった結果、低学年と高学年との差はわずかに有意水準を逸していた。

Table 7 学年別にみたCP児群のIsss平均

		学習場面	遊び場面
低 学 年 (N=5)	M	. 166	. 036
	SD	. 150	. 043
高 学 年 (N=8)	M	-. 023	-. 019
	SD	. 215	. 140

そこで、CP児群のIsss平均と普通児群のIsss平均とを学年別に比較し、低学年と高学年のどちらの方に両群の差がより顕著であるかを検討した(Table 8., Table 9.)。その結果、低学年では遊び場面に普通児群のIsss平均がCP児群より高かった($P < 0.05$, $t = 3.81$, $df = 4.21$)が、学習場面においては両群に有意な差は認められなかった。しかし、高学年では、学習と遊びの両場面とも1%の有意水準で普通児群のIsss平均がCP児群のそれよりも高かった(学習場面 $t = 3.00$, $df = 296$, 遊び場面 $t = 3.26$, $df = 296$)。つまり、CP児群の普通児群との差は、学習と遊びの両場面とも低学年よりも高学年の方が著しかった。このことは一般に、学年が高くなるにつれ他児童とCP児の能力差が開き、統合が難しくなる(石部・満上, 1980)という問題と符節を合わすところがあるように思われる。つまり高学年ほど種々の面で他児童との能力差がより顕著となり、交友関係の成立が難しくなっているのではないかと推測される。さらに児童集団においては、高学年になるほど相手の人格特性や、学業・技能に尊敬を理由として友人を選択することが多いと言われる(田中, 1964)が、こうしたことから、他児童との能力差がより顕著となる高学年におけるCP児の交友関係の成立の困難さが、より一層指

Table 8 低学年の普通児群とCP児群のIsss平均

		学 習	遊 び
低 学 年	普 通 児 (N = 181)	M	. 123
		SD	. 205
	C P 児 (N = 5)	M	. 166
		SD	. 150

Table 9 高学年の普通児群とCP児群のIsss平均

		学 習	遊 び
高 学 年	普 通 児 (N = 290)	M	. 199
		SD	. 198
	C P 児 (N = 8)	M	-. 023
		SD	. 215

摘されるであろう。

②社会的地位とADL得点、IQ、PIH得点との関係

個人調査から得られた各CP児のそれぞれの得点は、Table 10.に示す通りであった。CP児の社会的地位とADL得点、IQ、PIH得点との関係を明らかにするため、まず学習と遊びのIsss平均のプラスの者を交友関係良好群とし、マイナスの者を交友関係不良群として両群間で各得点の差の検定を行なった(Table 11.)。その結果ADL得点とIQに有意な差が見い出された。ADL得点とIQの平均値は交友関係良好群の方が低かったことより、普通学級での社会的地位の高いCP児群にADL能力、IQの低さが指摘された。これはADL能力、IQの低いCP児ほど他児童(普通児)の介助を得ることが多く、それがかえって他児童のCP児に対する接触機会を豊富にし、交友関係の成立に結びついたのでないかと推測されるが、ここにはかなり同情的、共感的理解が混在しているかもしれない。この点は、社会的地位の高い者ほどIQが高いという結果が出された普通児の傾向(上田, 1963)とは異なるため、今後さらに検討を加えてみる必要があろう。

Isss値とPIH得点との関係において、交友関係の良好群と不良群との間に、有意な差は見い出されなかった。しかしIsss値とPIH得点との相関については(Table 12.)、学習場面で自己中心性、固執性、劣等感の項目に、また遊び場面で劣等感の項目に、それぞれ正の相関が5%の有

Table 10 個人調査から得たC P児の各得点

対象児	性別	学年	Isss (社会測定的地位指数)		ADL 得点	IQ	学業成績	P I H 得点													
			学習	遊び				一般的活動性(G)	生活習慣(L)	自主性(In)	根気強さ(Pa)	指導性(Le)	社会性(S)	情緒安定(Es)	自己中心性(E)	顕示性(SD)	固執性(P)	活動過多性(H)	神経質(N)	劣等感(IF)	未熟さ(I)
			C-1	m				1	.02	.00	87	50	1	12	18	18	18	6	20	19	15
C-2	f	2	.40	.12	42	120	4	11	14	12	9	6	14	18	20	18	18	19	16	18	12
C-3	m	2	.28	.02	96	90	2	15	14	20	16	12	19	20	16	20	18	17	17	18	20
C-4	f	3	.10	.01	87	55	1	0	4	0	6	0	11	20	17	19	14	10	18	16	20
C-5	m	3	.03	.03	75	65	1	16	18	18	12	0	16	12	18	20	20	18	18	20	20
C-6	m	4	-.23	-.16	100	85	1	2	2	3	3	0	16	15	10	13	9	15	18	18	12
C-7	m	5	-.02	.01	81	93	3	9	11	14	9	0	14	20	18	20	18	18	20	18	20
C-8	m	5	-.20	-.03	100	120	4	5	1	10	7	5	20	17	19	14	15	16	18	18	15
C-9	m	5	.36	.23	81	95	3	18	11	19	18	5	13	13	14	19	14	18	14	19	20
C-10	f	5	-.02	-.01	81	96	2	4	6	10	0	0	15	7	11	1	16	12	18	18	4
C-11	m	6	-.18	-.17	97	120	3	7	9	17	15	9	17	20	16	14	16	20	13	13	18
C-12	m	6	-.48	-.10	100	108	2	16	17	18	19	13	18	13	13	15	10	18	10	14	18
C-13	m	6	.29	.15	95	106	3	12	8	16	12	0	20	20	20	20	20	18	20	20	14

Table 11 交友関係良好群と不良群の各得点の差

	交友関係良好群(n=7)		交友関係不良群(n=6)		t	
	M	SD	M	SD		
ADL得点	80.43	17.10	93.17	8.67	2.43*	
I Q	83.0	24.75	103.67	13.37	3.94**	
学業成績	2.14	1.12	2.5	0.96	0.62	
得点	一般的活動性	12.0	5.42	7.17	4.52	1.76
	生活習慣	12.43	4.78	7.67	5.47	1.44
	自主性	14.71	6.47	12.0	5.07	0.88
	根気強さ	13.0	4.24	8.83	6.54	1.05
	指導性	4.14	4.16	4.5	5.06	0.12
	社会性	16.14	3.36	16.67	1.97	0.44
	情緒安定	17.43	3.20	15.33	4.50	0.77
	自己中心性	17.14	2.17	14.5	3.40	1.28
	顕示性	18.43	2.32	12.83	5.76	1.61
	固執性	17.14	2.36	14.0	3.32	1.56
	活動過多性	16.71	2.81	16.5	2.57	0.13
	神経質	17.14	1.73	16.17	3.48	0.46
	劣等感	18.71	1.39	16.5	2.14	1.71
	未熟さ	18.0	3.21	14.5	5.35	1.08

*...P < 0.05 **...P < 0.005

Table 12 IsssとIQ ADL得点, 性格得点との相関係数

項目	学習	遊び	
(1)ADL得点	-.582*	-.514	
(2) I Q	-.089	-.038	
得点	一般的活動性	+.287	+.485
	生活習慣	+.150	+.214
	自主性	+.164	+.277
	根気強さ	+.074	+.194
	指導性	-.180	-.198
	社会性	-.253	-.214
	情緒安定	+.234	-.003
	自己中心性	+.581*	+.439
	顕示性	+.406	+.406
	固執性	+.615*	+.502
	活動過多性	+.072	+.109
	神経質	+.144	+.148
	劣等感	+.556*	+.622*
	未熟さ	+.053	+.095

有意水準 P < 0.05

意水準において認められた。従って、Isss 値の高い者ほどこれらの特性が良好であったと解される。しかし、例えば、劣等感という特性は、それが少ないほど交友関係が良好であるということはいふまでもないが、交友関係が良好で友人に受け容れているということが、この劣等感を軽減させているとも考えられる。このように考えれば、社会的地位と正の相関が認められた上述の種の性格特性は、社会的地位の高い者の重要な規定因子であるとみなされると同時に、学級内に占める社会的地位の高さの所産として形成されたものとも解釈できる。

3) CP児と他児童の交友関係における結合と分離の要因

①結合要因

CP児の他児童選択理由 (Fig. 1) と他児童のCP児選択理由 (Fig. 2) は、ともに「好感」の理由が最も多かった。このことから他児童とCP児の交友関係は、「感じがよい」、「何となく好き」などの消極的な感情要因で、最も多く交

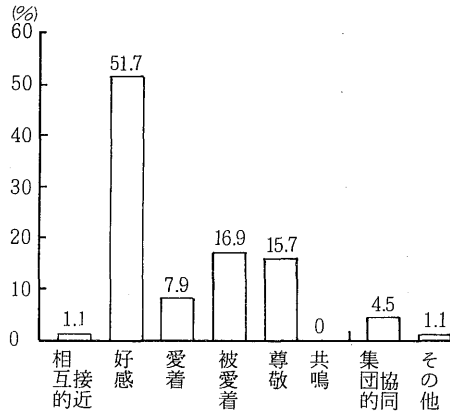


Fig. 1 CP児の他児童選択理由

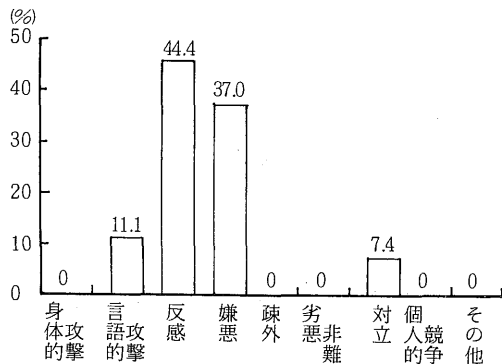


Fig. 3 CP児の他児童排斥理由

友関係を成立させていたと解される。これは、他児童間の選択理由及び田中 (1964) の調査で示された普通児の一般的傾向と同様の結果であった。従って、CP児と他児童の結合要因は、基本的に他児童間のそれと同じ傾向であると考えられる。他児童間の選択理由の傾向と異なり、CP児と他児童の結合要因に障害が反映されていたところは、①CP児の他児童選択理由に「尊敬」を理由とする者や、「～してくれるから」という「被愛着」を理由とする者が多かったこと、②他児童のCP児選択理由に「障害」に理由をおく者が多かったこと、である。これらは当然の結果であり、①については、CP児が他児童に対して、自分の劣性を意識した結果、他児童を尊敬することが多く、それが交友を結ぶ要因になったのではないかと考えられる。また、CP児は他児童から世話されたり、面倒をみてもらったりすることが多く、それが「～してくれるから」などに象徴される「被愛着」理由に反映されていたと考えられる。②の「障害」理由については、この理由で他児童から選択されるCP児は学年全体の16.3%であり、

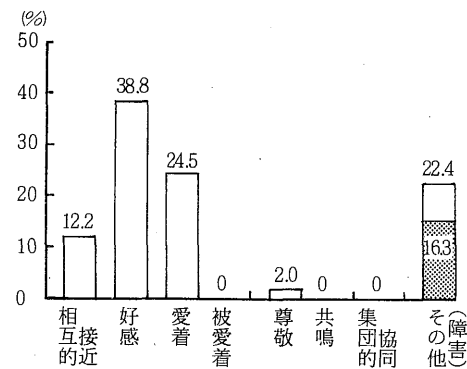


Fig. 2 他児童のCP児選択理由

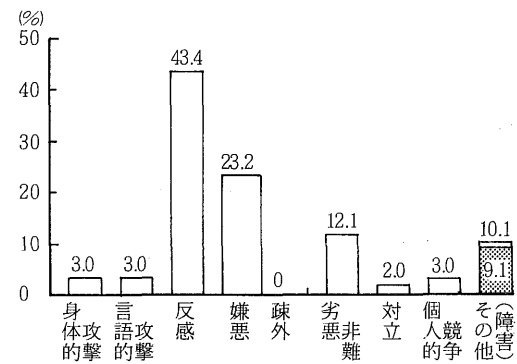


Fig. 4 他児童のCP児排斥理由

「好感」、「愛着」の理由について多かった。

②分離要因

C P児の他児童排斥理由 (Fig. 3) と他児童のC P児排斥理由 (Fig. 4) は、ともに「反感」と「嫌悪」の理由によって大部分が占められていた。このことから他児童とC P児の交友関係の分離要因は、反感を感じている程度の消極的な反発要因か、あるいは反感のより一層強いもので悪質な行動側面に対する積極的な反発要因から、互いを排斥することが多かったと解される。しかし、この傾向は、他児童間の排斥理由及び普通児における田中 (1969) の調査でも確かめられている。従ってC P児と他児童の分離要因は、結合要因と同様に基本的には他児童間の場合にみられる傾向と変わらなかつと言え。他児童間の排斥理由と異なり、C P児と他児童の分離要因に障害が反映されていたところは、①他児童のC P児排斥理由に「障害」理由があげられていたこと、②C P児の他児童排斥理由に「劣悪非難」の理由が全くなかつたこと、である。しかしながら、①の「障害」理由で他児童から排斥されるC P児は、学年全体の9.1%であり、選択理由の16.3%に比して少なかつた。これは他児童がC P児を直接の「障害」理由で排斥した他に、学業や技能、人格特性に対する劣悪非難の理由で排斥した者が多かったからだと考えられる。

結 論

ソシオメトリック・テストの実施を通して、C P児の社会的地位と学年、I Q、学業成績、性格A D L能力との関係、及びC P児と普通児の交友関係における結合と分離の要因を検討してきた。その結果、C P児の社会的地位は先行研究の知見と同様に普通児に比して低く、そして所属下位集団では、多くのC P児が学習と遊びのいずれかの場面で、いわゆる周辺児か孤立児であった。社会的地位を、学級生活でC P児がどのように受け入れられているかの一つの指標と考えれば、これらの結果から、C P児の学級適応には問題のあることがうかがえる。

C P児群の社会的地位を学年との関係でみた場合、学習と遊びの両場面とも、低学年より高学年の方に低い傾向が示された。このことは、一般に学年が高くなるにつれ、統合が難しくなるといわれる問題と符節を合すように思われる。さらに

C P児群の社会的地位は、性格特性の自己中心性、劣等感、固執性との間に正の相関が認められた。とりわけ劣等感は、両場面とも高い関係が認められた。従って、この性格特性はC P児の学級適応を促す上での重要な要因として考えられよう。しかし予想に反し、社会的地位とA D L能力及びI Qとの関係については、負の相関が見い出され、今後なお、その関係を検討してみることが重要な課題として残された。

他方、C P児と普通児の結合及び分離要因では、「障害」理由が結合要因で16.3%、分離要因で9.1%含まれていた他は、全体的な傾向として他の児童間の場合と基本的に変わらなかつた。

今後はさらに、継続的かつ包括的な事例研究にまたなければ明確な傾向を得ることができない点も多くあるので、個々の事例をとりあげて考察を進めていくことにしたい。また、調査対象の範囲を中学校段階にまで拡充するなどして、普通学級における脳性麻痺の社会的地位をより一層明らかにしていきたいと考えている。

文 献

- 1) Anderson, E.M. (1973): The disabled school child, A study of integration in primary schools. Methuen, London, 290-295.
- 2) 安藤隆男・石部元雄(1979): 普通学級における脳性麻痺児の適応に関する一研究、心身障害学研究第三巻、163-172.
- 3) Billings, H.K. (1963): An exploratory study of attitudes of non-crippled children in three selected elementary schools. Journal of Experimental Education, 31, 381-387.
- 4) Centers, L. and Centers. R. (1963): Peer group attitudes toward the amputee child. Journal of Social Psychology, 61, 127-132.
- 5) Dewey, G. & Force, D.G. (1956): Social status of physically handicapped children. Exceptional children, 23, 3, 104-107.
- 6) 石部元雄・溝上修編(1980): 世界の特殊教育, 福村出版.
- 7) 松山安雄(1963): 学級における社会的地位と行動特性の研究, 大阪学芸大学紀要, 第5, 12-24.
- 8) 水原泰介・剣持一郎(1960): 学級集団における

- 対人関係の発達, 教育社会心理学研究, 第 1 号, 36—41
- 9) 長島貞夫(1967): 児童社会心理学—性格の社会的形成—, 牧書店.
- 10) O'Moor, A.M.E. (1980): Social acceptance of the physically handicapped child in the ordinary school. *Child: care health and development* 6, 317—337.
- 11) 沢田慶編(1972): 学校教育心理学, 東京大学出版会, 253—259.
- 12) 心身障害教育研究プロジェクトチーム(1980): 心身障害児発展の可能性を伸ばすための教育実践に関する研究—普通学級に在籍する心身障害児の人間関係・その 1・肢体不自由児を対象として—, 東京都立教育研究所.
- 13) 田中熊次郎(1947): 学級社会に於ける結合と分離, 児童心理, 金子書房, 23—29.
- 14) 田中熊次郎(1964): 実験集団心理学, 明治図書, 336—345.
- 15) 上田敏見(1963): 学級集団における Social Acceptance の研究(7), —社会測定的地位と知能・学業成績との関係—, 教育社会心理学研究第 4 巻第 1 号, 57—64.

Summary

An Investigation on the Relationship of Cerebral Palsied Children and Their Normal Classmates in Elementary Schools

Izumi Nibu and Motoo Ishibe

This study intended to find out how great influence the intellectual ability, character or motor function of integrated cerebral palsied children have upon personal relationship in their classes. By means of sociometric test, the analysis was made from the viewpoints like this; (1) What is the relation between the social status of cerebral palsied children and their IQ, academic achievement, character, or ADL. (2) What is the effect of handicaps on the association or separation in the relationship between cerebral palsied children and their normal classmates. Subjects were 13 integrated cerebral palsied children and 471 normal classmates of theirs in elementary schools.

The findings were as follows; (1) The social status of the group of cerebral palsied children was significantly lower than that of normal groups. The difference was especially significant in the case of children in higher grade. (2) Though cerebral palsied children whose social status was high showed desirable tendency in some kinds of character, i.e. egocentricity, perseveration, and inferiority; they did not show high level of IQ, which plays an important role in the case of normal children. This result suggested that further analysis was necessary from then on concerning this aspect. (3) It was showed that in some cases normal children chose cerebral palsied children as their friends or rejected them for reasons concerning handicap. 16.3% of choice and 9.1% of rejection were based on the reasons of handicap.

Key word: cerebral palsy, integration, sociometric test